

言葉違っても仲良く／補修した道通る姿に感動

# 東ティモールPKO帰国

東ティモールで国連平和維持活動(PKO)に従事する陸上自衛隊の第四次派遣部隊(四百五人)の百四人が四日夜、国連のチャーター機で熊本空港に帰国した。国連が東ティモールPKOを大幅に縮小するのに伴い、残る三百一人も今月下旬までに帰国、陸自は二年四か月に及んだ活動を終える。

PKOでは初めて女性隊員も加わり、小泉首相も現場を訪問した。会見した派遣群副群長の迫輝昌・二等陸佐(50)は「活動は現地で評価された。任務を終えて安心した」と話した。

「言葉は分からなかったが、活動を通して現地の人たちと仲良くなれたのが何より励みになった」。道路補修を担当した三曹(33)は「補修した道を現地の人々が見るのが何よりもうれしかった」と振り返った。

東ティモール派遣部隊は二〇〇二年三月に第一次隊は活動が雨期と重なったため、豪雨と暑さに苦しめられた。施設担当の一尉(46)は「土砂崩れが起きるたび、補修作業に出かけた。苦勞はしたが、現地の人に喜ばれて良かった」と話した。

警備担当の三曹(25)は「言葉は分からなかったが、活動を通して現地の人たちと仲良くなれたのが何より励みになった」。道路補修を担当した三曹(33)は「補修した道を現地の人々が見るのが何よりもうれしかった」と振り返った。

「言葉は分からなかったが、活動を通して現地の人たちと仲良くなれたのが何より励みになった」。道路補修を担当した三曹(33)は「補修した道を現地の人々が見るのが何よりもうれしかった」と振り返った。

東ティモール派遣部隊は二〇〇二年三月に第一次隊は活動が雨期と重なったため、豪雨と暑さに苦しめられた。施設担当の一尉(46)は「土砂崩れが起きるたび、補修作業に出かけた。苦勞はしたが、現地の人に喜ばれて良かった」と話した。

警備担当の三曹(25)は「言葉は分からなかったが、活動を通して現地の人たちと仲良くなれたのが何より励みになった」。道路補修を担当した三曹(33)は「補修した道を現地の人々が見るのが何よりもうれしかった」と振り返った。

「言葉は分からなかったが、活動を通して現地の人たちと仲良くなれたのが何より励みになった」。道路補修を担当した三曹(33)は「補修した道を現地の人々が見るのが何よりもうれしかった」と振り返った。

東ティモール派遣部隊は二〇〇二年三月に第一次隊は活動が雨期と重なったため、豪雨と暑さに苦しめられた。施設担当の一尉(46)は「土砂崩れが起きるたび、補修作業に出かけた。苦勞はしたが、現地の人に喜ばれて良かった」と話した。

警備担当の三曹(25)は「言葉は分からなかったが、活動を通して現地の人たちと仲良くなれたのが何より励みになった」。道路補修を担当した三曹(33)は「補修した道を現地の人々が見るのが何よりもうれしかった」と振り返った。

「言葉は分からなかったが、活動を通して現地の人たちと仲良くなれたのが何より励みになった」。道路補修を担当した三曹(33)は「補修した道を現地の人々が見るのが何よりもうれしかった」と振り返った。



帰国した自衛隊員ら(4日午後6時30分、熊本空港で)

東ティモール派遣部隊の撤収業務の一部には、陸自OBらで作る非営利組織(NPO)「日本地雷処理・復興支援センター」が協力する。宿営地で隊員たちが使っていた約五百五十戸のプレハブ住宅を現地で活用してもらったため、センターが五人前後のスタッフを派遣し、分解や組み立ての方法を教える。同時に国際協力機構(JICA)が中心になって、ブルドーザーなど重機の技術指導も行う。センターによると、PKO

に参加した欧州諸国の部隊が撤収後、NPOがアフターケアの面で協力する。これは珍しいが、日本では初の試み。カンボジアPKOの際には、現地に提供したプレハブが、有効活用されず、廃屋になってしまっていた。センターではすでに平崎憲昭理事長らが現地入りして準備を進めており、七月ごろから活動を始める予定だ。